

書紀』の記述等を総合すると、7世紀中葉以降の大がかりな都づくりがこの辺りにも及んでいたと想定される。しかし、その遺構の実体については未調査部分が多いこともあってなお謎に包まれており、また適切な遺跡名も与えられていないのが現状である。小字名をつけるなどの案も考えられたが、遺構が小字藪ノ下の範囲にとどまらない大規模なものと推定されたため、この報告ではとりあえず飛鳥寺南方遺跡と仮称することとした。その範囲は、北を飛鳥寺の寺域南限、南を伝飛鳥板蓋宮などの宮殿遺構の北限（未確定）、東を酒船石が所在する丘陵、西を飛鳥川によって囲まれた平地部とし、そこに存在する7世紀代を中心とする遺構群の総称とする。したがって、今回検出した石組溝等は、この飛鳥寺南方遺跡の東を流れる基幹排水路として位置づけられる。

2. 検出した遺構

調査地は、飛鳥寺瓦窯が立地する丘陵の西斜面に接した村道と水田にまたがり、道路部分の盛り土を除去して旧道と旧水田の耕土・床土に達した。床土の下には上から青灰色粘質土層と黄灰褐色粘質土層の厚い堆積があったが、ほとんど遺物を含まない。この下には石組溝の埋没後に堆積した大量の砂層があった。この砂層を掘り下げて石組溝を、黄灰褐色粘質土層を取り除いて石敷などを検出し、その下層で石組暗渠や柱列を検出した。

今回検出した遺構は、7世紀中頃から平安時代初めにかけてのものであるが、調査面積が限定されたため、大きくA～C期の3時期に分けるにとどめ、詳細な時期区分は今後の周辺地域の調査の進展をまつことにしたい。

A期 石組暗渠SX10と、東側の丘陵岩盤を削った傾斜面SX13がある。

石組暗渠SX10は、丘陵西斜面を削る大規模な土木工事をともなって構築されており、幅・高さともに約0.8m、全長24m以上で丘陵沿いに緩く弧を描きながら西北方向に延びる。工事は、まず花崗岩岩盤を削って傾斜面SX13を設け、この傾斜面沿いの岩盤と地山の粘土層を掘り込んで幅約2m・深さ約0.8mの掘形を設ける。ついで、人頭大からひとかかえほどの玉石を3段ないしは

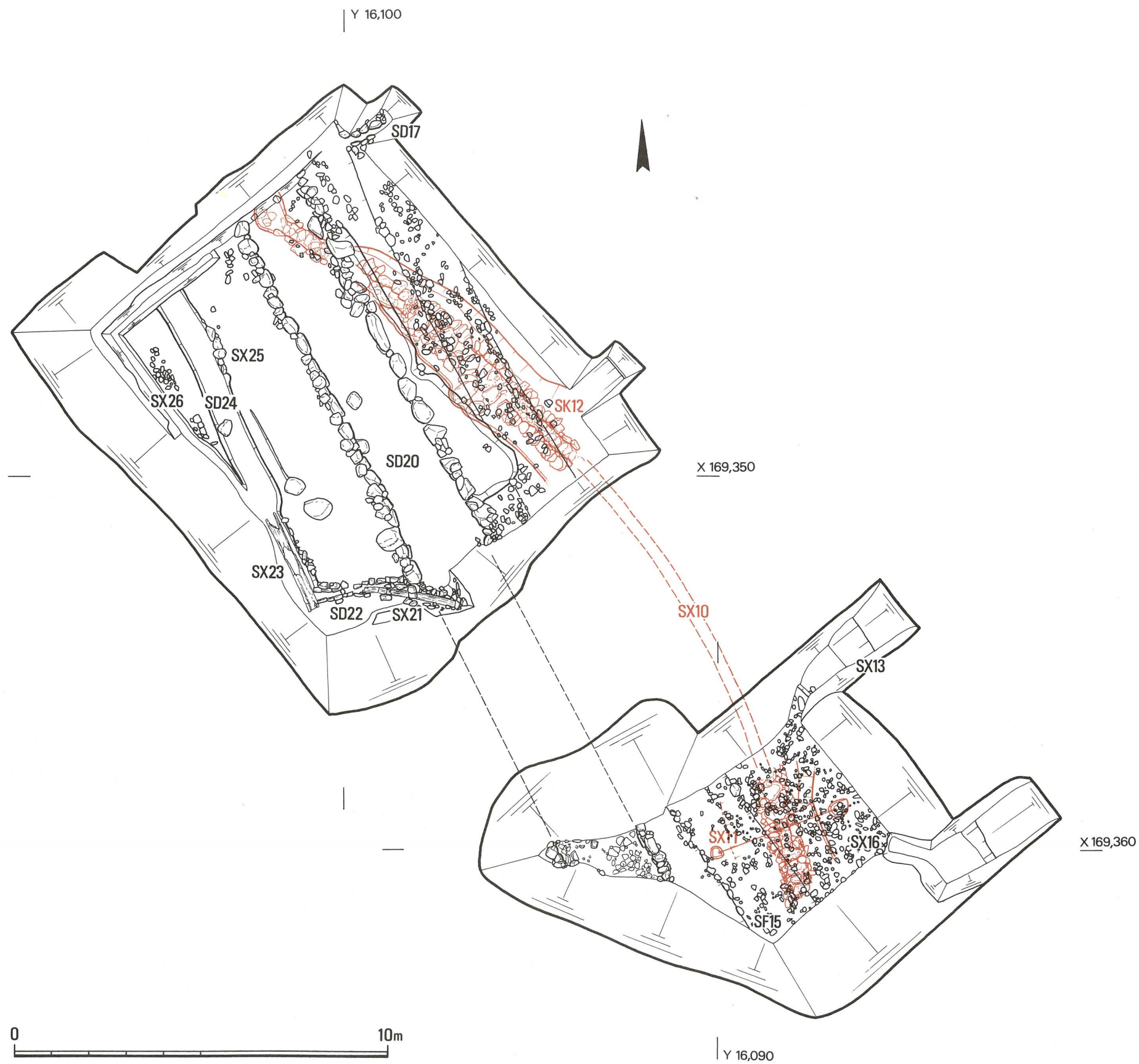


fig. 2 飛鳥寺南方遺跡第1・2・3次調査遺構実測図 (1 : 125)

4段積んで両側石とし、蓋石を置いて大小の川原石を隙間に詰める。底には平らな玉石を1列から3列敷きつめるが、第3次調査区の中央部の約1.5mの間は、削り出した岩盤をそのまま底とし、その北約1mの間は拳大の玉石を敷いて底とする。内法の幅と高さはともに約0.5mで、内部には細かい粘土と砂が水平に堆積していた。各層ともに炭の碎片がかなり含まれ、また細長い木片が数片出土した以外に遺物はなかったが、最下層の粘土の微遺体分析を行った結果、両層ともベニバナの花粉が大量に含まれていることが判明した。(8頁の報告参照)。

なお、第2次調査区の石組暗渠は、柱列SX11の柱掘形によって蓋石が外されている以外、遺存状態は良い。しかし、第3次調査区では、その大部分が石組溝SD20の設置にともない破壊され、また、土坑SK12によっても壊されており、中央部のごく一部で蓋石が残っていたにすぎない。その他の部分では側石や底石だけが残し、その他の石はほとんど抜き取られていたが、その抜き取り穴から奈良時代の土器(平城宮Ⅳ段階)が出土した。暗渠掘形からは7世紀代の土器が、暗渠の直上を覆う整地土からは飛鳥Ⅲ～Ⅳ段階の土器が少量出土しており、丘陵斜面の掘削と暗渠の設置は、7世紀中頃に遡る可能性がある。

B期 石組溝SD20、木樋SX21・23、石組溝SD22、木樋抜き取り溝SD24、石列SX25、石敷SX26がある。

A期の石組暗渠は、花崗岩岩盤を掘り崩した黄褐色山土を用いた整地層で覆われている。その上には、丘陵上から流れ込んだ土砂が堆積した状況が土層観察の結果得られた。B期の石組溝SD20は、この堆積層上面から掘り込み、幅約4mの掘形を設けて側石を積む。深さは最大で0.8m、溝底の幅は広いところで約2m、狭い所で約1.7mである。両岸には長さ1.1～0.6mほどの大型の花崗岩を1段、または、ひとかかえ大から人頭大の玉石を2段から3段積み護岸とする。溝内には大小の石が大量に堆積していたので、石積みはさらに1段ほど高かった可能性がある。また、第2次調査区では両岸から幅1mの間に砂岩切石や玉石を用いた底石が認められた。この溝の全長は21m以上に及び、ほぼまっすぐ伸びているが、このまま直進すれば丘陵にぶつかるので、第3次調査

区の少し北で西北方向に曲がると推定される。この石組溝からは、7世紀後半から8世紀初め頃の土器が大量に出土しており、溝として機能していた時期の中心がその頃にあることを示している。なお、この溝はC期にも存続する。

木樋 SX21・23は、玉石を並べて石組溝 SD20の水をせき止め、木樋を利用して水を北へ流す暗渠である。木樋 SX21は、幅15cm、厚さ11～13cm、長さ205cmの木樋Aと、幅14cm、厚さ9～10cm、長さ80cmの木樋Bの2本を連結して石組溝から木樋 SX23に水を取り入れる施設である。木樋Aの石組溝内に出る部分に蓋板はなく、両側の立ち上がり部分も低い。木樋の両側は砂岩の切り石を並べて補強するが、木樋 SX23と木樋Bの間約90cmの間には玉石を敷いて底石とし、両側に砂岩の切石を並べて幅10～20cm、深さ約30cmの石組溝 SD22とした部分がある。蓋石らしいものは木樋Bに接した玉石1個しか認められず、この部分が開渠となっていたか、暗渠となっていたのかは確認できなかった。

木樋 SX23は、幅30cm、厚さ22cm、長さ270cmの材に深さ11～12cm、底幅12～18cmの溝を穿ち、幅30cm、厚さ10cmの蓋板をのせたもので、石組溝と並行し北へ水を流す。石組溝 SD22との接続部分には深さ11cm、上幅37cm、下幅7.5cmの逆台形の切込みを設け水を取り入れるが、南側の小口を塞ぐ装置は認められなかった。北側の次の木樋との接続部分には、両側と底を浅く彫りくぼめた仕口があるが、別材を木樋の接続部分に当て、漏水を防ぐための工夫と見られる。また、木樋の接続部分には玉石をいくつか敷いて不等沈下を防いでいる。木樋はさらに北へ延びていたと推測されるが、抜き取り溝 SD24によって抜き取られている。なお、この木樋内に堆積した粘土も微遺体分析を実施したが、寄生虫卵などは検出されなかった。

石列 SX25は、ひとかかえから人頭大の玉石を並べたもので、大部分が失われているが、石組溝 SD20の西約2mの位置に並行して設けられていたと思われる。石はやや傾斜をもって立てられているので、石組溝の西側に幅約2m、高さ0.3m程度の堤があったと推定される。その西側にある石敷 SX26は抜き取り溝 SD24と小溝群によって壊されているが、かつては石列 SX25の西、つまり木樋 SX23の上は石敷で完全に覆われていたと推定される。

柱列 SX11は、A期の石組暗渠 SX10の蓋石を一部壊してつくられた掘立柱の遺構である。柱間寸法は1.7m等間。調査区内で柱根 2 箇所と柱痕跡 1 箇所を検出したが、塀になるのか建物になるのか不明である。

C期 石組溝 SD20の東にある石敷舗道 SF15と、小規模な石組溝 SD17、第 2 次調査区で検出した石敷舗道の東にある石敷 SX16がある。これらは、石組溝 SD20の東側に丘陵からの土砂がかなり堆積してから設けられたものである。

石敷舗道 SF15は石組溝から約 1 m 東にあり、幅約1.4mの間に玉石を敷きつめ、両側に見切りの玉石を並べたもの。石組溝 SD17は、丘陵からの雨水を舗道を横断して石組溝 SD20に流す施設である。

石敷 SX16は、玉石を粗く敷いたものであり、凹凸が激しい。この石敷上から 9 世紀後半から10世紀前半にかけての土師器が出土しており、この頃までこの石敷と石敷舗道・石組溝などが機能していたことが判明した。

3. 検出した遺物

土器・瓦・埴輪・土製品・木簡・砥石・砂岩の切石などがあるが、その大部分は石組溝 SD20から出土したものである。

木簡は14点（うち削り屑 9 点）が出土した。紀年を有するものはないが、文書木簡とみられるものが含まれている。

- □□前□白 (147) ・ (10) ・ 3 081型式
- [] □□□□□□□□

瓦は、重弧文軒平瓦が 2 点と丸・平瓦が少量あり、重弧文軒平瓦のうち 1 点は川原寺創建時のもので、飛鳥寺にも使われている。丸・平瓦の中にも飛鳥寺所用と思われるものがある。

砂岩の切石は、伝飛鳥板蓋宮や、最近では酒船石北方遺跡の石垣遺構に多数使われていることが判明したものと同質同形で、なかには斜面を削り出したものもある。石組溝 SD20の砂層から破砕したものが多数出土したほか、第 2 次調査区で検出した石組溝 SD20の底石には26cm四方の切石が使われていた。